

【1】曹操に献帝を奉戴させる（『三国志』卷十 荀彧伝より）

荀彧。字 文若。潁川 潁陰人也。（中略）

建安元年（中略）漢献帝、自河東 還洛陽。太祖 議奉迎 都許。（中略）

彧勸太祖曰「昔 高祖東伐、為義帝 縞素、而天下歸心。

自天子播越、將軍 首唱義兵。徒以山東擾乱、未能遠赴關右。

然猶分遣將帥、蒙險通使。雖禦難于外、乃心無不在王室。

是、將軍匡天下之素志也。今車駕旋軫、義士有存本之思、百姓感旧而増哀。（中略）」

太祖遂至洛陽、奉迎天子都許。天子拜太祖大將軍、

進彧為漢侍中、守尚書令。常居中、持重。

【2】才能に基づき人材を推挙（荀彧伝 注引『典略』）

彧折節下士、坐不累席。其在台閣、不以私欲撓意。

彧有羣從一人、才行実薄、或謂彧「以君当事、不可不以某為議郎邪。」

彧笑曰。「官者所以表才也、若如来言、衆人其謂我何邪。」其持平正皆類此。

【3】河北の平定を立案、九州制に反対（荀彧伝）

（建安）五年、（袁）紹と与に連戦す。太祖 官渡を保ち、紹 之を囲む。

太祖 軍糧の方に尽きんとす。書して 彧に与え、許に還り、以て紹を引かんと議す。

「今軍食 少なしと雖ども（中略）先に退かば、勢は屈するなり。

已に半年、必ず將に変 有らんとす。此れ奇を用うる時なり。失うべからず。」と。

太祖 乃ち住く。皆な 彧の策する所の如きなり。

（建安）六年、糧 少なし。与に 河北を相い支うるに足らず。太祖、

紹の新たに破るに因り、其の間を以て、劉表を撃討せんと欲す。

彧曰く。「今 紹の敗れ、其の衆 心を離る。遂に之を定むべし。

而るに、兗、豫を背とし、遠く江、漢に師すれば、

若し紹 其の余燼を收め、虚を承け、以て人後に出づれば、則ち公の事 去らん。」と。

（建安）八年、太祖 彧の前後の功を録し、表して 彧をして萬歳亭侯に封ず。

（建安）九年、太祖 鄴を抜き、冀州牧を領す。或 太祖に説く。

「宜しく 古に復し、九州を置くべし。則ち 冀州 制する所 広大にして、天下 服さん」

太祖 將に 之に従わんとす。彧 言いて曰わく、「是くの若くんば、則ち、

冀州 当に 河東、馮翊、扶風、西河、幽、并之地を 得べくして、奪わるる者、衆し。

前日、公 袁尚を破り、審配を禽とし、海内 震駭す。必ずや人人、自ら其の土地を保つを

得ざるを恐れ、其の兵衆を守るなり。今、分けて冀州に属さしめば、將に皆 心を動かすべし。

且つ、人の多く説くらく、（函谷）関右の諸將、閉関之計を以てす。今、此を聞かば、

おもえらく、必ず以て 次に奪われん。則ち 袁尚 其の死を寛ぐを得、袁譚 弑を懐く。

劉表遂に江漢（長江・漢水）之間を保ち、天下未だ凶り易からざるなり。

願わくは公、急ぎ兵を引き、先に河北を定め、然る後、旧京（洛陽）を修復し、

南して荊州に臨み、貢の入らざるを責めよ。天下大いに定まり、乃ち古制を議せよ。

此れ社稷長久の利なり」と。太祖遂に九州の議を寝む。（中略）

太祖女を以て、彧の長子、憚に妻す。後に安陽公主と称す。

（建安）十二年、復た彧の邑千戸を増し、合せて二千戸たり。

【4】荀彧が爵位を辞退する（荀彧伝 注引『彧別伝』）

太祖又表曰「昔袁紹侵入郊甸、戦於官渡。

時兵少糧盡、凶欲還許、書与彧議、彧不聽臣。（中略）

及紹破敗、臣糧亦盡、以為河北未易凶也、欲南討劉表。彧復止臣、陳其得失、

臣用反旆、遂吞凶族、克平四州。（中略）

彧之二策、以亡為存、以禍致福、謀殊功異、臣所不及也。

是以先帝貴指縱之功、薄搏獲之賞。前所賞祿、未副彧巍巍之勲、乞重平議、疇其戸邑。」

彧深辞讓。太祖報之曰「君之策謀、非但所表二事。君密謀安衆、光顯於孤者以百数乎。

以二事相還而復辞之、何取謙亮之多邪。」

太祖欲表彧為三公、彧使荀攸深讓、至于十数、太祖乃止。

【5】荀彧が寿春で死ぬ（荀彧伝）

（建安）十七年、董昭等謂、太祖宜進爵国公九錫備物、以彰殊勲。密以諮彧。

彧以為、太祖本興義兵以匡朝寧国、秉忠貞之誠、守退讓之実。

君子愛人以徳、不宜如此。太祖由是心不能平。

会征孫権、表請彧勞軍于譙。因輒留彧、以侍中光祿大夫持節、參丞相軍事。

太祖軍至濡須、彧疾、留寿春。以憂薨、時年五十。諡曰敬侯。

明年、太祖遂為魏公矣。

【6】荀彧の死に関する異説（同前注引）

魏氏春秋曰。太祖饋彧食、発之乃空器也、於是飲藥而卒。咸熙二年、贈彧太尉。

【7】荀彧の死の直前の曹操（卷一 武帝紀）

十七年春正月、公還鄴。天子命公贊拜不名、入朝不趨、劍履上殿、如蕭何故事。

馬超余衆梁興等屯藍田、使夏侯淵擊平之。

割河内之蕩陰、朝歌、林慮、東郡之衛国、頓丘、東武陽、発干、

鉅鹿之慶陶、曲周、南和、広平之任城、趙之襄国、邯鄲、易陽以益魏郡。

冬十月、公征孫権。

【8】吳主伝（卷四十七）とその注引

十六年、權徙治秣陵。明年、城石頭、改秣陵為建業。聞曹公將來侵、作濡須塢。

十八年正月、曹公攻濡須、權与相拒月余。曹公望權軍、歎其齊肅、乃退。

初、曹公恐江濱郡縣為權所略、徵令內移。民轉相驚、自廬江、九江、蘄春、

広陵戸十余萬皆東渡江、江西遂虛、合肥以南惟有皖城。

吳歴曰。曹公出濡須、作油船、夜渡洲上。權以水軍圍取、得三千余人、

其没溺者亦數千人。權數挑戰、公堅守不出。權乃自来、乘輕船、從濡須口入公軍。

諸將皆以為是挑戰者、欲擊之。公曰、「此必孫權欲身見吾軍部伍也。」

敕軍中皆精嚴、弓弩不得妄發。權行五六里、回還作鼓吹。

公見舟船器仗軍伍整肅、喟然歎曰、「生子当如孫仲謀、劉景升兒子若豚犬耳」

權為箋与曹公、説、「春水方生、公宜速去。」別紙言、「足下不死、孤不得安。」

曹公語諸將曰、「孫權不欺孤。」乃徹軍還。

魏略曰。權乘大船來觀軍、公使弓弩乱髮、箭著其船、船偏重將覆、權因回船、

複以一面受箭、箭均船平、乃還。

【9】荀彧の死の直後の曹操（卷一 武帝紀）

十八年春正月、進軍濡須口、攻破權江西營、獲權都督公孫陽、乃引軍還。

詔書并十四州、復為九州。

夏四月、至鄴。五月丙申、天子使御史大夫郗慮持節策命公為魏公。

曰、朕以不徳、少遭愍凶、越在西土、遷於唐、衛。（中略）

後漢尚書左丞潘勗之辭也。勗字元茂、陳留中牟人。

【10】『三國演義』孟宗崗本第六十一回

却説曹操在許都、威福日甚。長史董昭進曰。「自古以來、人臣未有如丞相之功者。

雖周公、呂望、莫可乃也。櫛風沐雨、三十餘年、掃蕩群凶、與百姓除害、使漢室復存、

豈可與諸臣幸同列乎。合受魏公之位、加『九錫』以彰功德。」你道那「九錫」

一、車馬。二、衣服。三、樂縣。四、朱戶。五、納陛。

六、虎賁。七、鈇鉞。八、弓矢。九、鉅鬯圭瓚。

侍中荀彧曰。「不可。丞相本興義兵、匡扶漢室、當秉忠貞之志、守謙退之節。

君子愛人以徳、不宜如此。」

曹操聞言、勃然變色。董昭曰。「豈可以一人而阻衆望。」遂上表請尊操為魏公、加九錫。

荀彧歎曰：「吾不想今日見此事」操聞深恨之、以為不助己也。

建安十七年冬十月、曹操興兵下江南、就命荀彧同行。

彧已知操有殺己之心、託病止於壽春。忽曹操使人送飲食一盒至。

盒上有操親筆封記。開盒視之、並無一物。彧会其意、遂服毒而亡。年五十歲。

後人有詩歎曰。文若才華天下聞、可憐失足在權門。

後人漫把留侯比、臨没無顏見漢君。

其子荀惲、發哀書報曹操。操甚懊悔、命厚葬之、謚曰敬侯。

【二】荀彧に関する詩・碑

『芸文類集』卷四十九 職官部五 光祿大夫

踐行則無轍跡。出言則無辭費。

詩。魏陳王曹植、光祿大夫荀侯、誄曰。

納規無敬辱之心。機情有密靜之性。

如冰之清、如玉之潔。法而不威、和而不褻。

若乃奉身蹈道。勤礼貴徳。

百寮歛歔、天子霑纓。機女投杼、農夫輟耕。

動咨事間。匪雲予克。

輪結輒而不轉、馬悲鳴而倚衡。

然後教以黃中之叡。守以貞固之直。

註焉若洪河之源。不可竭也。

『芸文類集』卷四十八 職官部四 尚書令

確焉若華岳之停。不可拔也。

又曰。太祖進荀彧為漢侍中。守尚書令。

故能言之斯立。行之斯成。

碑。後漢潘昺尚書令荀彧碑曰。

身匪隆汚。直哉惟情。

夫其為徳也。則主忠履信。孝友温恵。

紊綱用乱。廢礼復經。

高亮以固其中。柔嘉以宣其外。

於是百揆時序。王猷允塞。

廉慎以為己任。仁恕以察人物。

告厥成功。用俟萬歳。

詩。魏陳王曹植、光祿大夫荀侯、誄に曰わく。

冰の清き如く、玉の潔き如し。法にして威さず、和にして褻れず。

百寮歛歔し、天子纓を霑らす。機女杼を投げ、農夫耕を輟む。

輪輒を結びて転らず、馬悲しく鳴きて衡に倚る。

又た曰わく。太祖、荀彧を進め、漢の侍中、守尚書令と為す。

碑。後漢、潘昺。尚書令、荀彧の碑に曰わく。

夫れ其の徳たるや、則ち主忠、信を履む。孝友、恵を温む。

高亮、以て其の中を固む。柔嘉、以て其の外に宣ぶ。

廉慎、以て己の任となす。仁恕、以て人物を察す。

踐行、則ち轍跡なし。出言、則ち辭費なし。

納規、敬辱の心なし。機情、密靜の性あり。

乃ち身を奉げ、道を踏むがごとし。礼に勤め、徳を貴しとす。

咨を動かし、事は聞こゆ。云うに匪ざりて、予め克つ。

然る後ち、教、黃中の叡を以てす。守、貞固の直を以てす。

註焉ること、洪河の源のごとし。竭きるべからず。

確焉ること、華岳の停のごとし。拔すべからず。

故に能く、之を言えば斯ち立ち、之を行はば斯ち成る。

身、隆汚に匪ず。直なる哉、惟情。

綱を紊し、乱を用う。礼を廢し、經を復す。

是に於いて、百揆、時に序たり。王猷、允に塞たり。

厥を告げ、功を成す。用つて萬歳を俟つ。

百揆時序は、『左氏伝』文公より。王猷允塞は『詩經』より。告厥成功は『尚書』禹貢より。

おしまい